

自他動詞の派生対立の分類再考 —自動詞と他動詞の両方に現われる「-er-」の位置づけ—

博士前期課程
7M601 小柳 昇

キーワード： 自動詞化辞 他動詞化辞 自他両極化語尾 自他顕在化辞 語彙概念構造

1 はじめに

本稿は、形態上ペアになっている自動詞と他動詞の分類を再考し、両方に現われる「-er-」という辞について、正しい位置づけを試み、語彙概念構造を用いて自動詞化専用の辞である「-ar-」(-or-)、他動詞化専用の辞である「-as-」(-os-)との違いを明らかにすることが目的である。

2 先行研究と問題点

日本語には、語を構成する音韻の一部を共有し、派生対立関係をもつと思われる自動詞と他動詞のペアが多く存在する。その詳しい対応関係については、本居春庭の『詞の通路』（1828）より今日に至るまで数多くの研究がなされており、ほぼ研究し尽くされた感がある。しかし、マクロ的に全体を捉えた分類とミクロ的に細部を捉えた分類の両方を視野に入れたものは少ない。このような視点に欠けるために起る混乱の一つが「-er-」の位置づけである。「流れる」「逃げる」「焼ける」では「-er-」は自動詞と関係しているように見え、「寄せる」「決める」「繋げる」「生ける」「開ける」では逆に他動詞と関係しているように見える。また、「開く(aku)」と「開ける(akeru)」では後者が他動詞なのに、なぜ「焼く(yaku)」と「焼ける(yakeru)」では反対に自動詞になるのか。このようなことはミクロの側面だけを見ているために起る問題である。

3 本稿のアプローチ

本稿は、まずマクロ的に捉える視点として、文語の活用型と語尾をベースにして分類した望月(1944)と、「動態論的」な立場で自他動詞の派生関係によって分類を試みた西尾(1954)、奥津(1967)の分類法と分析アプローチを土台とし、ミクロの側面では先行研究で取り上げられた自他動詞の対立関係を詳細に検討した上、派生対立関係にある自他動詞の分類を再考し、一覧表にまとめた¹。そして「-er-」の働きについては、影山(1996)が語彙概念構造を用いたアプローチによって反使役化という概念を出しているが、本稿ではそれをさらに発展させる形で、自動詞と他動詞に現われる「-er-」が何かを明らかにする。

4 派生対立の分類を再考する

4. 1 概略

本稿の分類の全体は次のとおりである。(以下、文語動詞の活用の終止形をく >に示す)

	五段動詞 <文語>四段		一段動詞 <文語>二段	
	他動詞	自動詞	他動詞	自動詞
A 両極化	【・su】	【・ru】	【・su】	【・ru】
■A-1	渡す <渡す>	渡る <渡る>		
■A-2	流す <流す>			流れる<流る>
■A-3		寄る <寄る>	寄せる<寄す>	
▲A-3'			似せる<似す>	似る <似る>
B 自動詞化				※上一段↑
B-1 「-ar-」	【-(u)】	【-ar(u)】	【-(u)】	
■B-1-1		決まる<決まる>	決める<決む>	
■B-1-2①	刺す <刺す>	刺さる<刺さる>		
②	繋ぐ <繋ぐ>	繋がる<繋がる>	繋げる<繋ぐ>	
▲B-1-2'	つかむ	つかまる	つかまえる	
B-2 「-or-」	【-(u)】	【-or(u)】	【-(u)】	
■B-2-1		(籠る <籠る>)	込める<込む>	
■B-2-2	積む <積む>	積もる<積もる>		
C 他動詞化				
C-1 「-as-」	【-as(u)】	【-(u)】		【-(u)】
■C-1-1	逃がす<逃がす>			逃げる<逃ぐ>
▲C-1-1'	冷やす			冷える<冷ゆ>
+ 「-akas-」	冷やかす			
■C-1-2	動かす<動かす>	動く <動く>		
▲C-1-2'	散らす<散らす>	散る <散る>		
+ 「-akas-」	散らかす			
■C-1-3①	満たす<満たす>			満ちる<満つ>
②	生かす<生かす>		生ける<生く>	生きる<生く>
C-2 「-os-」	【-os(u)】	【-(u)】		【-(u)】
■C-2-1	— — —	— — —	— — —	— — —
■C-2-2	及ぼす<及ぼす>	及ぶ <及ぶ>		
■C-2-3	落とす<落とす>			落ちる<落つ>
D 自他顕在化				
「-er-」	【-(u)】	【-(u)】	【-(u)】 → 【-er(u)】	【-(u)】 → 【-er(u)】
■D-1		続く <続く>	続ける<続く>	
■D-2	焼く <焼く>			焼ける<焼く>

本稿では、以下の基準で自・他動詞を認定し、派生対立関係をもつ自・他動詞を収集している。

- 1) 派生対立関係の自・他動詞とは、語を構成する音韻に共通する部分があり、それに自・他動詞化の語尾または辞²を付加することによって規則的に生成されているものである。
- 2) 第一に、自動詞と他動詞で主客が交替する場合に、対象にヲ格名詞をとる動詞を他動詞とし、そのヲ格名詞がガ格で主体を表す動詞を自動詞と認定する。
- 3) 第二に、自他動詞で主客が交替しない場合でも、他動詞が主体運動かつ主体変化を表わす概念をもつなら、派生対立する自他動詞として収集している³。
- 4) 巻末資料の分類表においては、形態のみ対応し、構文上自他の対応をなさない動詞についても、自他の派生辞と単他動詞・複他動詞のつながり⁴を考える上で重要なため載せてある。

また、本稿の分類の特徴は次の通りである。

- 1) 文語動詞の形態に注目し、自・他動詞化の語尾、辞の種類によって大きく A~D の四つのグループに分け、その中で口語の形態（活用型）によって中分類、小分類をたて、全体で 15 に分類した。望月（1944）⁵と奥津（1969）の分類とは、概略で図 1 のように対応している⁶。
- 2) B の中分類では C の「-os-」との平行性を重視し、該当数は少ないが「-or-」（B-2）を立てた⁷。
- 3) 小分類では、C-1 と C-2 の平行性を重視してそれぞれ小分類 1~3 をたてた。ただし、C-1-1 に対応する C-2-1 には該当する自他動詞のペアはない⁸。

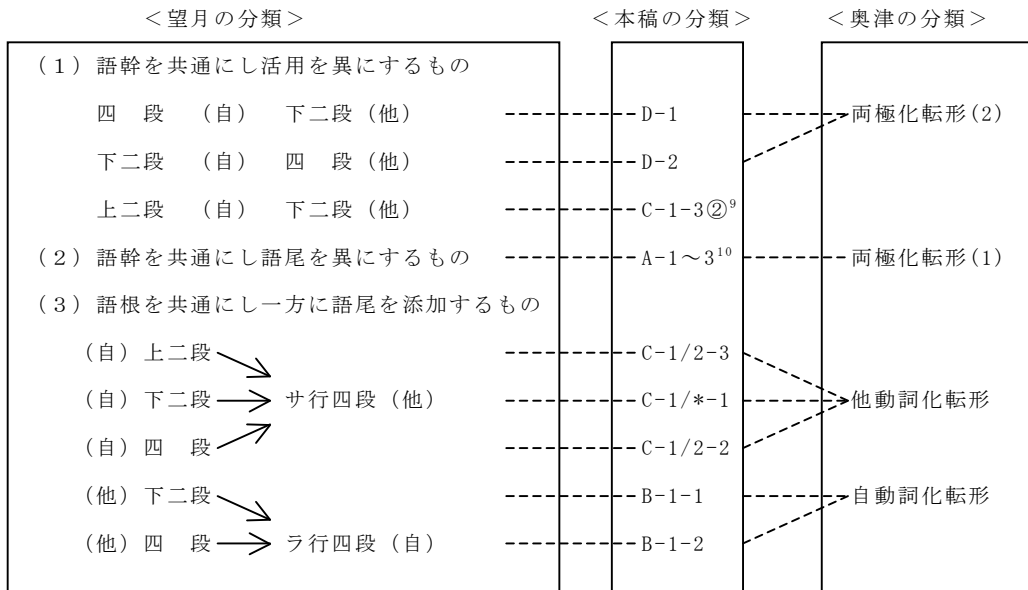


図 1 先行研究の分類との対応

- 4) 下位分類をむやみに増やすことを避け、やや性質を異にしている場合でも、15 分類内で処理できるものについては亜種として扱い、分類番号に「'」記号を付加した。亜種は次の四つである。A-3' : 「似る-似せる」のみ。 B-1-2' : ②の亜種に「つかむ-つかまる-つかまえる」を入れる¹¹。 C-1-1' C-1-2' : 自動詞に「-akas-」つけて他動詞を派生するもの¹²。
- 5) 併存する自・他動詞については、動態的な派生関係の把握を重視し、15 分類内でその対応関係を分類一覧表の中に示した¹³。また、亜種扱いではないが、B-1-2 と C-1-3 は①と②のグループ分けをして、②では併存する他動詞¹⁴の出自がわかるように示した。

4. 2 各グループの解説

A : 自他両極化語尾を付加するグループ

共通部分に他動詞化語尾の「・su」と自動詞化語尾の「・ru」がついたペア。共通部分は単独で語とは成らず、派生の方向も特定できないため、奥津（1969）にならって両極化の語尾とみる。

■A-1：文語も口語も「・su」（四段／五段）と「・ru」（四段／五段）の対立になっている。

■A-2：自動詞は、文語の「・ru」（下二段）が口語で「・reru」（下一段）へ移行。

■A-3：他動詞は、文語の「・su」（下二段）が口語で「・seru」（下一段）へ移行。

B：自動詞化辞「-ar-」「-or-」付加グループ

他動詞が元で、自動詞化辞の「-ar-」または異形態の「-or-」がついて自動詞が派生したペア。

■B-1/2-1：元の他動詞は、文語の「-(u)」（下二段）が口語で「-er(u)」（下一段）へ移行。

■B-1/2-2：文語も口語も「-(u)」対「-ar/or(u)」となっている。

C：他動詞化辞「-as-」「-os-」付加グループ

自動詞が元で、他動詞化辞の「-as-」または異形態の「-os-」がついて他動詞が派生したペア。

■C-1/*-1：元の自動詞は、文語の「-(u)」（下二段）が口語で「-er(u)」（下一段）へ移行。

■C-1/2-2：文語も口語も「-(u)」対「-as/os(u)」となっている。

■C-1/2-3：元の自動詞は、文語の「-(u)」（上二段）が口語で「-ir(u)」（上一段）へ移行。

D：自他顕在化辞「-er-」をもつグループ

このグループは文語において自動詞と他動詞が同形の終止形を持つもので、活用型の違いによって自他の概念を区別していた。どちらが四段活用だったかによって二つに下位分類される。

■D-1：自動詞の方が四段活用で、下二

段活用の他動詞が口語で「-er(u)」（下一段）へ移行。（図2-ア）

■D-2：他動詞の方が四段活用で、下二

段活用の自動詞が口語で「-er(u)」（下一段）へ移行。（図2-イ）

奥津（1967）ではこれらを「両極化転形(2)」に分類し、「両極化転形(1)」（本稿の分類A）と同列に扱っている。しかし、同一のものが自動詞化に

も他動詞化にも使える場合と共通部分に別々の語尾「・su/・ru」を付ける場合を同列に扱うわけにはいかない。そこで本稿では、後述する語彙概念構造における「-er-」の現われる環境に注目し、Dの「-er-」を自他顕在化辞と名付け、Aとは別に扱う。

E：その他の派生対立関係

A~D以外の派生対立関係はその数が限定されており、一つのまとまったグループをなすわけではないので、一括してその他のグループ（E）に入れておく。（具体例は巻末の資料を参照）

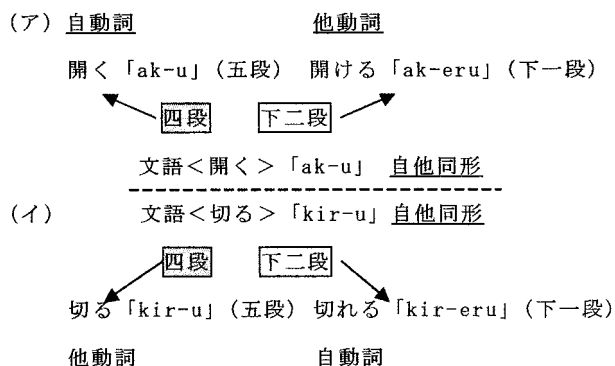


図2 D1とD2の文語と口語の対応

5 「-er-」の位置づけ

5. 1 各グループの特徴

4.1の全体図で編み掛けしたように、「-er-」はA~Dのすべてに現われることがわかる。各グループに共通していることは、文語下二段が口語下一段へと移行した結果、「-er-」が使われていることである。本稿ではこれを坪井(2001)に倣って活用形の「示差性の増大」による形態上の変化とみる。

しかし、Dとそれ以外のグループでは大きな違いがある。A~Cでは、別々の形態で存在する自他動詞の一方が文語から口語への移行にあたって「-er-」が現われたわけだが、Dでは文語において、終止形が同形の

動詞が自動詞と他動詞の概念を担っており、その一方が口語への移行にあたって「-er-」が現われたのである。すなわち「-er-」そのものは自他動詞の派生辞として機能しているわけではないが、Dにおいては、その「示差性の増大」による形態上の変化が結果的に自他の区別も担ったというわけである¹⁵。以上をまとめると、図3のようになる。それではなぜ「-er-」という一つの辞が、Dにおいて自動詞にも他動詞にも現れ得たのか。本稿では、これを語彙概念構造によって解明する。

自		他	
A	• ru ← (共通部分)	⇒ • su	
	• ru		• su A-1
	• reru		• su A-2
	• ru		• seru A-3
自		他	自
B		- (u)	C
B-1/2-2 -aru/oru		-u	-u
B-1/2-1 -aru/oru		-eru	-eru
		-iru	-asu/osu C-1/2-2
		-eru	-u D-1
		[下二]	[四]
D		終止形同形	- (u)
		[四]	[下二]
		-u	-eru D-2

図3 A~Dの派生対立（※イタリック体は口語の形態）

5. 2 Dグループの詳細

5. 2. 1 Dの対立関係をベースにする自動詞と他動詞の派生関係

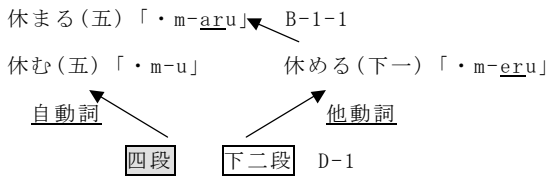
A~Cにおいて併存する自他動詞を丁寧に観察すると、Dの対立関係をベースにして、その上にそれぞれのグループの特徴である派生対立関係を持つペアが複数存在することがわかる。これらをD⁺と呼ぶことにする。このD⁺が存在するということは、見方を変えれば、Dは自他の対立が活用型の違いによってのみ行われており、対立形態としては原初的で、歴史的にかなり古い時代にそのペアが固定化したものであると推察される。それに対してA~Cは構文的な受身、使役との関連性があり、語彙的に生産性がある。つまりA~Cの生産的な派生辞または派生語尾は、D以外の動詞の派生対立の自他動詞を生むと同時に、Dでは表わし切れなかった概念を新たに付加するために用いられたと推察される¹⁶。次節にその重層的派生対立関係の例を示す。

5. 2. 2 D⁺の重層的構造

D⁺には、D-1 がベースになる「○-○/D-1⁺」と D-2 がベースになる「○-○/D-2⁺」がある¹⁷。本節ではこれらの重層的な派生対立関係を三種類示す。（意味の派生対応は 5. 2. 5 で解説する）

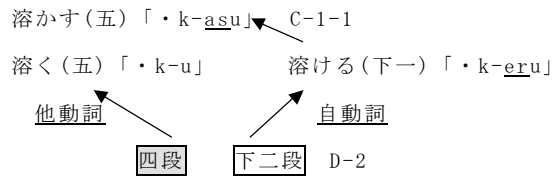
(1) 「B-1-1/D-1⁺」と「C-1-1/D-2⁺」

B-1-1 に分類される「休める」は、「休まる」のほかに「休む」という自動詞を持つ。これは、図 4 に示したように D-1 の自他対立をベースとして、B-1 の派生対立が成り立っていると考えられる。同類には { 屈まる/屈む : 屈める } { 伝わる/伝う : 伝える } { 縮まる/縮む : 縮める } { 緩まる/緩む : 緩める } { 絡まる/絡む : 絡める } などがある。一方、C-1-1 に分類される「溶ける」は、「溶かす」のほかに「溶く」という他動詞を持つ。これは、図 5 に示したように、D-2 の自他対立をベースとして、C-1-1 の派生対立が成り立っていると考えられる。同類には { 抜かす/抜く : 抜ける } { 欠かす/欠く : 欠ける } { 切らず/切る : 切れる } などがある。



文語<休む>「・m-u」自他同形

図 4 「休む」「休める」「休まる」の関係

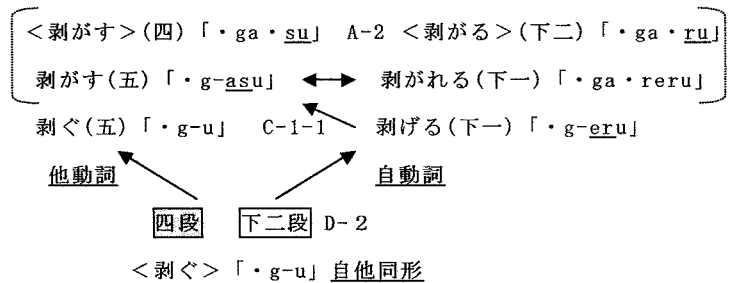


文語<溶く>「tok-u」自他同形

図 5 「溶く」「溶ける」「溶かす」の関係

(2) 「A-2(C-1-1)/D-2⁺」

A-2 に分類される「剥がす」と「剥がれる」は、それとは別に他動詞「剥ぐ」と自動詞「剥げる」の形態を持つ。これは図 6 に示したように、D-2 の自他対立をベースとして、C-1-1 を経て A-2 の派生対立が成り立っていると考えられる¹⁸。



<剥ぐ>「・g-u」自他同形

図 6 「剥ぐ」「剥げる」「剥がす」「剥がれる」の関係

5. 2. 3 D の語彙概念構造

奥津 (1967:57) では「-ar-, -as-の様に音形が明らかにちがう場合はいいが、同じ音形の-e-を同時に相反する自動詞化辞・他動詞化辞とするのは適当ではなかろう」とした。しかし、ここには発想の転換が必要である。音形が同形だから認められないと考えるのではなく、音形が同形であっても自他の対立を顕在化させられるほど、その動詞は共通の基盤に立っていた、と考えるべきである。こ

の共通の基盤が使役他動詞の概念構造であり、この概念構造を見ることによってDの「-er-」の働きが明らかになると考える。使役他動詞の語彙概念構造¹⁹とは図7に示したように、大きく上位構造と下位構造とからなり、それが使役概念(CAUSE)で結びついている。非能格自動詞と打撃・接触の他動詞(対象の変化が語彙的に含意されないもの)は上位構造に位置し、変化・移動の概念を有する非対格自動詞と存在など状態を表わす自動詞は下位構造に位置し、使役概念を有する他動詞は上位と下位にまたがるという関係にある。

(1) D-1とD-2に見られる表と裏の関係

D-1の<開ける>とD-2の<焼く>を例にとって、両グループが使役他動詞構造をベース(図7-イ)にした表と裏の関係であることを示す。D-2の<焼く>の自動詞の概念構造(口語:焼ける)は、動作主のXと対象のYが同定され、反使役化²⁰がおこるため、下位構造に焦点が当たり、非対格自動詞となると考える(図7-ウ)。<焼く>の他動詞の概念構造は、それとは反対に、外項Xと内項Yの同定がなされないために、XがYに働きかけること(上位構造)によってYが変化し、結果としてZという状態になる(下位構造)という使役構造全体に焦点が当たる(図7-ア)。このようにD-2の<焼く>については、使役概念構造の枠内で、(ア)がデフォルトで、矢印①のように自動詞の概念を顕在化させるように焦点をシフトする場合に「-er-」が現れる。

D-1の「開く」はこれと逆のことが起こっている。「開く」は、デフォルトが(ウ)で、矢印②のように他動詞の概念を顕在化させるように焦点がシフトする場合に「-er-」が現れる。筆者はDに関して言えば、認知的により際立っている方が強変化活用である四段活用になったと考える。

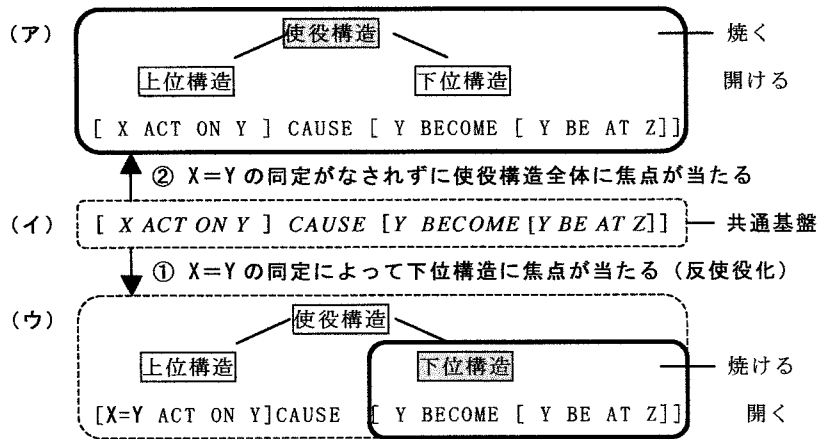


図7 使役構造を基盤とした自他動詞の概念の顕在化

つまり、他動詞の概念が際立っていたら、それが四段動詞となり、下二段動詞が自動詞の概念を担うことになり、逆に自動詞の概念が際立っていたら、それが四段動詞となり、下二段動詞が他動詞の概念を担うことになったと考える。そして裏表の関係にある①と②の焦点化に「-er-」が関わっているのである。

(2) 「外項・内項同定/非同定」と「再帰概念構造」の関係

「-er-」が現われる環境にはもう一つあり、それは自動詞が非能格動詞の場合である。例えば、D-1の<(人が)立つ>は非能格自動詞なので、上位構造のみに焦点が当たっているが、本稿では図8

(ウ)のように全体では再帰の語彙概念構造をもつと考える。つまり、位置変化（姿勢変化も含む）動詞は、その人が自身の体に働きかけて位置を変えるという再帰構造を持つと考えるわけである。

影山（2000：49）では、

「移動推進動詞」の場合に再帰の語彙概念構造を設定することを提案しているが、これは広く位置変化をともなう非能格自動詞に適用できるというのが本稿の立場である。そして、他動詞の<立つ>（口語：立てる）では、そのような同定がなされないため、上位・下位

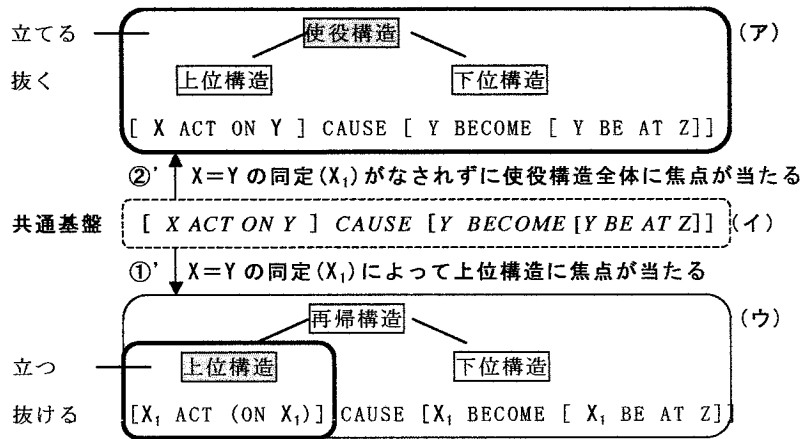


図8 再帰構造をもつ場合の自他動詞の概念の顕在化

構造ともに顕在化し、使役他動詞が成立すると考える（図8-ア）。類例は<進む><並ぶ>など。

このように再帰構造における非能格自動詞と使役他動詞の関係①'と②'は、上述の①と②と平行関係にある。<立つ>の場合、認知的により際立っていたのが自動詞の方で、これが四段動詞となり、②'のシフトに「-er-」が現われ、下二段の他動詞の概念が顕在化した。D-2の「抜く-（人が団体を）抜ける」ではこれと逆に、①'のシフトに「-er-」が現われる。

(3) 「-er-」によって顕在化する自他の概念

以上のことから、「-er-」によって顕在化する自他の概念は次のようにまとめられる。

[前提] 使役概念構造を共通基盤として持ち、その共通枠内において、

- 1) 外項 X と内項 Y を同定することで下位構造に焦点が当たり、非対格自動詞の概念が顕在化。
- 2) 外項 X と内項 Y を同定しないことで使役構造全体に焦点が当たり、使役他動詞の概念が顕在化。
- 3) 再帰構造の外項と内項を同定することで上位構造に焦点が当たり、非能格自動詞の概念が顕在化。
- 4) 再帰構造の外項と内項を同定しないことで使役構造全体に焦点が当たり、使役他動詞の概念が顕在化。

5. 2. 4 自動詞化接辞「-ar- (-or-)」、他動詞化接辞「-as- (-os-)」との違い

Dの「-er-」は本来、上述のように自動詞化または他動詞化のための辞ではない。自他動詞の概念を顕在化する際に現われる辞である。それに対して「-ar-」「-as-」はそれぞれ自動詞化と他動



(φは項が抑制され構文上に顕在化しないことを示す)

図9 「XがYを決める」⇒「Yが決まる」

詞化の辞である。ただ「-ar-」も使役他動詞の概念構造から非対格自動詞を派生させる点では「-er-」と共通点がある。しかし、その派生原理は、影山（1996, 2000）で指摘しているように異なると考えられる。「-er-」の基本は反使役化で「-ar-」の基本は脱使役化である。外項 X が抑制されて構文上は現われないが、その動作主の存在が前提となっている脱使役化は、外項と内項を同定する反使役化と異なる²¹。「決める-決まる」を例にとって、その違いを簡略化して示すと図 9 のようになる（cf：図 7-ウ）。自動詞化辞の裏返しである他動詞化辞の「-as-」は、逆に構文上抑制されていた外項（ ϕ ）を顕在化させる働きをする。つまり、「-ar-」「-as-」の働きを「-er-」と対比して述べれば、次のようにまとめることができる。1)と 5)、2)と 6)が対応する。

5) 「-ar-」：外項 X を抑制することで使役他動詞を非対格自動詞に交替する。

6) 「-as-」：外項 X を非抑制（顕在化）することで非対格自動詞を使役他動詞に交替する。

3)、4)のように再帰構造をベースにするものについては、「-ar-」も「-er-」と同様、外項と内項を同定する働きがあると考えられ、次のような自他の対立が認められる。これは、より生産的な接辞である「-ar-」が元々「-er-」が担っていた「同定」の機能も持つようになったと見られる。

7) 「-ar-」：再帰構造の外項と内項を同定することで使役他動詞を非能格自動詞に交替する。

例：「上げる-(人が)上がる」「止める-(人が)止まる」「浸ける-(人が)(湯に)浸かる」など

8) 「-as-」：再帰構造の外項と内項を同定しないことで非能格自動詞を使役他動詞に交替する。

例：「(人が)逃げる-逃がす」「(人が)出る-出す」「(人が)降りる-降ろす」など

また、4)は多くの場合「内項 Y が非情物である」という意味制約が課せられ、人を対象とする場合には構文的使役にするしかないが、8)にはそのような意味制約はない。

例：「-er-」：山本は田中を *立てた／立たせた。山本は田中を *並べた／並べせた。

「-as-」：山本は田中を逃がした。山本は田中を(部屋から)出した。

5. 2. 5 D⁺の派生対立関係にみる意味の拡張と語彙概念構造

紙幅の都合で概略にとどまるが、前節に示した語彙概念構造を踏まえて、D⁺の重層的な意味の派生関係を語彙概念構造から見ておく。「B-1-1/D-1⁺」は、自動詞が非能格自動詞（休む、屈むなど）のものと非対格自動詞（縮む、緩むなど）のもの二つに分けられる。前者は、図 8 に示したように再帰構造の X₁ が他者 Y に付け替えられて、使役構造全体に焦点が移るのだが、「休む」「屈む」の場合、Y が「自身の体（の一部）」となり、結果として「体/頭を休める」「腰を屈める」という他動詞構文を生み出す。そしてその使役構造が脱使役化によって下位構造に焦点が移り「体/頭が休まる」「腰が屈む」という自動詞構文が生まれる。つまり [非能格自動詞] ⇔ [使役他動詞] ⇔ [非対格自動詞] という流れで動詞が派生していると言える。

一方、後者の場合は非対格自動詞が二つと使役他動詞が一つという構成になるが、その非対格自動詞の性質が異なる。ベースとなる「縮む」「緩む」は反使役化によって下位構造が焦点化した、自然

発生的概念をもつ非対格自動詞である。一方「縮まる」「緩まる」は、「縮める」「緩める」という使役他動詞の概念を前提にして脱使役化で派生した非対格自動詞である。そのため次の例のように、行為者（人）が想定される場合は反使役化の自動詞は不自然になり（例1）、想定されない場合は逆に脱使役化の自動詞が不自然になる（例2）。この場合、[反使役化の非対格自動詞]⇒[使役他動詞]⇒[脱使役化の非対格自動詞]という流れで動詞が派生していると言える。

例1：二人の実力差が *縮んだ／縮まった。 例2：気が緩んだ／*緩まった。

6 まとめ：自他顕在化辞としての「-er-」の位置づけ

「-er-」は第一に、二段活用動詞の一段活用動詞化という活用形の示差性の増大という歴史の流れで生まれた形態であった。そしてDのペアにおいては、それが自他の概念を顕在化させ、区別することにも寄与していた。この点に注目し、本稿ではDの「-er-」を自他顕在化辞と命名し、他のグループのものとは区別した。そして、同じ「-er-」という音形をもつものが自他の両方の概念の顕在化を担うことは決して矛盾したことなく、Dのように使役概念構造を共通基盤として持つ動詞においては、外項と内項の「同定」と「非同定」といういわば前後にスイッチを入れ替えるような認知操作によって自動詞と他動詞の概念を表わし分けていたためであることを明らかにした。同定というスイッチを入れる反使役化は、Dのような終止形を同じくし、共通の使役概念構造をもった動詞であったからこそ成立したと言える。それ以外の数多くの自他の派生対立は、構文的使役、受身と相通じる辞である「-as-」「-ar-」（・su、・ruを含む）を用いることになるのである。

¹ 主に検討、参考にしたのは、奥津(1967)、佐久間(1983)、寺村(1982)、西尾(1954)、村木(1991)、望月(1944)、森田(1994)、国立国語研究所(1982)である。分類した自他動詞のペアは合計275組(A:41, B:63, C:75, D:87, E:9)である。

² 本稿では、辞を「-○○(u)」と表示するが、これは動詞の終止形の語末母音「-u」の前部に「○○」を付加することを意味する。例：「-as(u)」の場合「kar-u」(枯る)下二段→「kar-asu」(枯らす)、「-er(u)」の場合「kir-u」(切る)四段→「kir-eru」(切れる)。また、文語下二段活用の「ワ行」の動詞は「-ar(u)」「-as(u)」の付加によって[w]の音韻添加が起るため、「u-u」(植う)→「u-waru」(植わる)となる。なお形態上、仮名単位での切れ目を示す場合には「・」を使うことにする。

³ 他動詞の対象物ではなく、他動詞の動作主が変化を被る場合には、主客交替は起らず、変化主体をそのまま主格に据えたものが自動詞になると考えられる。例：「Xが大学を受ける」-「Xが大学に受かる」。なお「照る-照らす」「化ける-化かす」はこれとは異なる要因によって主格交替しないが、これも自他のペアとして収集されている。

⁴ 奥津(1967:60-62)では、目的語を一つしかとれない他動詞を単他動詞、ヲ格とニ格の二つの目的語をとる他動詞を複他動詞と呼び、自他の派生辞が「単他動詞⇔複他動詞」相互の派生にかかわっていることを指摘している。

⁵ 望月は対立を16に分類し、最後に「括約して表示」した物として図1に示したものを掲げている。(p.471)

⁶ 本稿の大分類では、文語動詞の終止形を用いた。これは第一に自他動詞の派生対立は口語になって生まれたものではないからであり、第二に、文語動詞の終止形によって派生対立の関係を明解に示すことができるからである。動詞の形態については、歴史上、連体形の終止形への進出および二段動詞の一段化などの流れがあり、どの形態を自他の対立として立てるかには分類者によって異なる。しかし、一度派生対応のグループが形成された後は、類推によって同じ派生規則が適用されると考えられる。したがって、文語の終止形で派生対応関係を大きく分類することの意義は損なわれまいと考える。望月(1944)では、二段

活用動詞は、終止形にとって替わった連体形で対立を示しており、奥津(1969)では、口語動詞の終止形で対立を示している。

⁷ 望月(1944)と奥津(1967)にはないが、国立国語研究所(1982)の分類にはそのような視点が見て取れる。(pp. 4-8)

⁸ もともと「-os-」に分類されるペアの数はそう多くない。口語では見つからないが、文語において、自動詞が下二段活用で、かつ他動詞が四段活用というのが存在した可能性は否定できない。

⁹ 上二段と下二段の対立である「生きる-生ける」「のびる-のべる」は、望月(1944)、国立国語研究所(1982)では活用の違いが自他の違いとなるものとして扱われている。しかし、これに該当する例が2例しかなく、併存する他動詞がある派生対立の分類を優先させたため、本稿では、C-1-3②に所属させ、Dグループでは四段動詞と下二段動詞の対立のみを扱う。

¹⁰ 望月(1944)の(2)にはA-3'が含まれていない。上一段活用は語幹と語尾の区別がないために、「語幹を共通にし活用を異にする」という分類基準に合致しないためである。奥津(1967)でも「似る・着る・見る」を他動詞化転形(1)に含めて、独自に音韻転形ルールを定めているが、本稿では音韻的に考えて共通部分を抽出したため「似る-似せる<似す>」はA-3の亜種とした。

¹¹ ②は併存する他動詞として文語下二段(口語では「-eru」)の他動詞があることが特徴である。「捕まえる」の文語<つかまふ>は「つかむ」+接辞「ふ」という語源説をとり、「捕まえる」は「つかむ」と間接的に対応していると考えられる。

¹² 「-akas-」は形態上の特徴と意味特徴を考慮すると、基本的な他動詞化辞「-as-」に「ka」を挿入し、通常とは異なる(多くはマイナス評価の)意味を生み出したと考え、本稿では独立した下位分類を立てずに、Cグループの亜種として位置づける。

¹³ 15分類に属さない派生関係の自他の対立も存在する。(例：B-1-1の「混ぜる-混ざる」には他に「混じる」という自動詞がある。また、C-3-1の「尽きる-尽かす」には他に「尽くす」という他動詞がある。「混じる」「尽くす」のほうは『日本国語大辞典 第二版』(小学館)の初出例の年代を見る限り古いと考えられる。)また、継続・反復を表す接辞「ふ」が付いた自他動詞については、新たに下位分類を立てず、併存する自他動詞として分類表に併記した。(例：向く：向かう-向ける)

¹⁴ B-1-2とC-1-3では、文語において終止形が同形の下二段の他動詞も存在したものがあつた。その場合は、現代語では五段の他動詞と下一段の他動詞の二つの形態が併存することになる。

¹⁵ 川端(1997)が「露出形・被覆形」という概念により論証しているように、動詞活用の成立期には「時の助動詞を下接する唯一の形」(p. 115)である連用形が重要な地位を占めていたと考えられる。Dでは終止形は同形だったが、下二段活用は、連用形の母音[e]が四段活用の[i]と対立しており、さらに終止形と連体形の同一化を経て、最終的には一段動詞化し、口語で「-er(u)」という終止形になった(これが坪井(2001)が指摘する活用形の「示差性の増大」である)。口語の形態だけ見ると、「-er-」が自他動詞を派生する辞のように見えるが、実際は活用型の違いによる帰結なのである。下二段と四段の連用形の母音の対立から自他動詞化辞の「-e-」を抽出することは可能であるが、やはり自他の両方に関わることは説明されなければならない。

¹⁶ 西尾(1954)では、他動詞「-er-」(本稿のB-1-1)が「-ar-」に先行していたことを論証している。

¹⁷ 巻末資料ではD-1+にB-1-1、B-2-1、C-1-2の三種(10組)、D-2+にC-1-1、A-1(C-1-1)、A-2(C-1-1)の三種(6組)を登録。

¹⁸ 「剥がれる<剥がる>」は、他動詞<剥ぐ>(四段)に受身の助動詞「る」が付いたと見ることもできる。

¹⁹ 本稿は基本的に影山(1996)の表示方法に従ったが、便宜上、一部簡略化して示している。

²⁰ 影山(1996: 189-194)で、反使役化が起る条件として「対象物の<内面的コントロール>が認識される」ことを挙げ、英語のように自他両用動詞で派生辞に頼らずに自他が交替する場合の使役化は反使役化のみで、脱使役化は起らないと指摘している。これは本稿の終止形を同じくするDグループの特徴と相通じるところがある。

²¹ 影山(1996: 184-189)では、脱使役化が「～である」構文と共通性を持ち、「動作主を統語的に表示することはできない」が、「動作主が存在が前提になっている」ことを、反使役化の場合と対比して示している。